

生徒のための公文書館利用－公文書館利用キットの必要性

垣花 優子†

はじめに ー公文書館の利用と生徒たちー

- 1 学校を取り巻く環境と公文書館
- 2 「公文書館利用キット」作成の必要性
- 3 「公文書館利用キット」導入編 ー歴史と公文書館ー 中学校のあるクラスにて
 - 3-1 小さな歴史「思い出」と「記録」
 - 3-2 お家アーカイブズ(記録資料) ー金城家の引っ越し風景からー
 - 3-3 「沖縄」の場合
 - 3-4 「歴史」の正体
 - 3-5 「記録」の在処

おわりに

はじめに ー公文書館の利用と生徒たちー

平成7年8月に沖縄県公文書館(以下、当館という。)が開館して12年が経過した。資料収集や整理業務の充実、展示会、講演会や写真会等の普及行事をとおして、その認知度は少しずつ高まってきている。しかし、なお利用者増加は変わらぬ課題であり、なかでも若年層を対象とした利用促進については特に努力が求められているのが現状である。

当館に来館しての利用だけでなく、職員が学校現場で行う出前講座への参加を含めても、全体の利用数からすると生徒、学生の利用は一般のそれと比較してまだ低く、彼らを対象とした行事も全てが満足とはいえない結果となった。

公文書館に関心をもってもらい、足を運んでもらうのは容易ではない。そもそも公文書館という概念が一般の人々にも十分には浸透していないのである。若い人々に利用してもらうには、今日、明日の利用者、という側面のほかに「将来の利用者」という視点をもった息の長い取り組みが必要である。

「郷土の歴史は郷土の資料で学ぶ」という取り組みは既に多くの機関が実施しているところであるが、教科書等の二次資料だけでなく、生の資料によって若い人々が郷土の歴史を少しずつ掘り下げることができれば、それは彼らのなかに学習が定着するのを助けることであり、公文書館にとってもその存在意義の一つが発揮されることでもある。

1 学校を取り巻く環境と公文書館

しかし、そのような理想を成立させるための現状は厳しい。

平成19年10月、全国学力テストにおいて本県が全教科全国最下位であるという実態¹が明らかになり、関係者に衝撃を与えた。また、小中学校における総合的な学習の時間削減とそれに伴う主要教

†かきのはな ゆうこ 財団法人沖縄県文化振興会 公文書専門員

¹「全国学力・学習状況調査」。文部科学省が平成19年4月24日、全国の小中学校の最高学年(小学6年生・中学3年生)を対象に、国語、算数(数学)の2教科について実施した。

科の時数増加²や一昨年、全国的な問題となった、いわゆる「未履修問題」³に象徴される教育システムや主要教科重視の風潮の面からも、「郷土の歴史」は関係者の意識から追いやられる可能性が高いと思われる。このような状況のなかで一次資料を利用した歴史学習の立案や実施が困難なことは容易に想像がつくところである。

しかし、その現状がありながら、中学校学習指導要領（抜粋、下記のとおり）では、身近な地域の歴史の調べ学習や教育関連施設やその教材利用を促している。

中学校学習指導要領第1章 総則 第6-4

(4) 学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育団体の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること。

中学校学習指導要領 第2章 各教科 第2節 社会 【歴史的分野】 2内容

(1) 歴史の流れと地域の歴史

ア 我が国の歴史について、関心ある主題を設定しまとめる作業的な活動を通して、時代の移り変わりに気付かせるとともに、歴史を学ぶ意欲高める。

イ 身近な地域の歴史を調べる活動を通して、地域への関心を高め、地域の具体的な事柄とのかわりの中で我が国の歴史を理解させるとともに、歴史の学び方を身に付けさせる。

中学校学習指導要領第2章 各教科 第2節 社会【歴史的分野】 3内容の取扱い

(1)ア 生徒の発達段階を考慮し、抽象的で高度な内容や複雑な社会構造などに深入りすることは避けるとともに、各時代の特色を表す歴史的事象を重点的に選んで指導内容を構成することにより、細かな知識を記憶するだけでの学習に陥らないようすること。なお、年代の表し方や時代区分についても基本的な理解を得させるようにすること。

中学校学習指導要領第2章 各教科 第2節 社会 【歴史的分野】 3内容の取扱い

(1)オ 日本人の生活や生活に根ざした文化については各時代の政治や社会の動き及び各地域の地理的条件、身近な地域の歴史とも関連付けて指導するとともに、民俗学などの成果の活用や博物館、郷土資料館などの見学、調査を通じて、生活文化の展開を具体的に学ぶことができるようにすること。

学習指導要領では、関連教育機関との連携、地域の教材等の活用を呼びかけており、このような施設の範疇に公文書館も含まれていると考えれば、学習指導要領の後押しが得られているともとらえられる。しかし、活用する立場にあっては即、授業で利用できるストーリー性、あるいはテーマ性のある資料一式がなければなかなか手がのびないのが現実だろう。

² 平成19年11月30日、文部科学省発表。

³ 高等学校必修科目未履修問題。高等学校において、大学受験に必要な科目の授業数を増やし、結果として、これら以外の科目を必修科目であるにもかかわらず履修させずにいた問題。平成18年10月、富山県の県立高校においてこのような未履修問題が明らかになり、以降、熊本県を除く各都道府県で同様の事例が発覚した。これは学校教育法施行規則である学習指導要領に反した行為であったため、文部科学省は超法規的措置で問題に巻き込まれた生徒たちの救済に当たった。

2 「公文書館利用キット」作成の必要性

このような教育教材作成については、いくつかの場面をとおしてその必要性を痛感するようになった。

教師の方々の現状を知ったとき、というのが第一の場面である。平成19年8月、当館では「県立学校10年経験者研修」における学外研修を初めて受け入れ、10名余の教員の方々の参加を得た。その際垣間見た学校現場での現実を公文書館の利用と結びつけたとき、このままの状態ですぐに利用を呼びかけても応答はしてもらえないだろう、というのが抱いた実感であった。

5日間という短期間の研修のなかで、手にした資料は多くはなかったが、各自のテーマをみつけ関連資料を閲覧し、後日、実際に授業で使用した、という報告もあった。先生方は予想以上に公文書館資料に興味をもち、授業にも取り入れたいとの意欲を示してくれた。しかし研修終了後、現在（平成20年1月末日）に至るまで、再度訪れてくれた方は1人だけである。これは決して彼らの意欲が失われてしまったのではなく、学校での極めて多忙な現実がそうさせるのだと確信している。授業に加えて、進路やPTA関連業務、部活動の顧問活動、研修参加等、様々な仕事を抱えるなかで、公文書館まで足を運び膨大な資料から目的に沿った資料を選び、指導案を練る、というのは容易に取り組めることではない。「既存の公文書館利用キットがあれば利用したい」という声には賛同、というよりむしろこれまでこの類の材料を用意してこなかったことを反省させられた。

もう一つの場面、というのは、施設見学のために教師に伴われて当館を訪れる子供たちの無関心ぶり、一方、職場体験等に参加する子供たちのすばらしい意欲、という相反した姿勢に接するときである。この両者の反応は当館訪問のいきさつから考えて、前者は受動的、後者は能動的であることの違いであるが、恐らくいずれの場合も公文書館に対するイメージが曖昧なものであることにそうした大きな違いはないと思われる。しかし、興味を持たずに来た子供たちにも意欲的な子供にも、せっかくの訪問を公文書館が何のための施設なのかを少しでも理解する機会にしてほしいと思うようになった。短時間の見学のなかでの説明では対応できない公文書館の意義について、分かりやすく彼らに語りかける読み物を、そして実際に資料を利用したいという要望に対しては、これに加えて収蔵資料を利用した利用キットを作成できればと考えた。

予備知識を持たない大人に対して公文書館について理解してもらうのは容易ではない。子供たちに対してはなお困難である。しかも、公文書館の目的や収蔵資料の内容については未だ明確な共通認識があるわけではなく、図書館等の類縁機関との棲み分けも曖昧である現状で果たしてどのように公文書館を位置づければよいのか、という大きな戸惑いもある。

しかし、今回は試案として提案し、今後、第三者の意見を取り入れ加筆修正していければと思う。

ここでは、対象を主に中学生とすることとし、彼らにとってなるべく馴染み易く、また途中で飽きられないよう、いくつかの試みを行った。まず、舞台を中学校のあるクラスとし、堅苦しくならないよう口語体にするため生徒たちに向かって男性教師に語らせ、時には生徒と会話させること、そして一部漫画仕立てにし、文字づくしを避けること、である。

この読み物を導入編とし、主となる収蔵資料を利用したキットがこれに続くことになるのだが、今回はその第一段階として導入部分を、キットについては次回以降に作成する予定である。

3 「公文書館利用キット」導入編 ー歴史と公文書館 ある中学校のクラスにてー

ある中学校2年のあるクラス、総合学習の時間のこと。担任の新垣先生が授業を始めたところです。さて今日のテーマは何でしょう。

3-1 小さな歴史 「思い出」と「記録」

新垣先生 今日、歴史っていうものについて考えてみようと思う。

比嘉君 先生、今は歴史の時間じゃないよ。

新垣先生 人の話は最後まで聞くこと。歴史っていうのも、いつの時代とか歴史上の事件や人物についてだとか、ってわけじゃない。そんなことばかりが歴史じゃないんだよ。今日は「歴史」そのものっていうのが何なのか、ってことについてみんなに考えてほしいんだ。でも大きさに考えるなよ。人間が一人でもいればそこには「歴史」が生まれるんだからな。このクラス一人々、それぞれの家、学校、皆がよく行くショッピングセンター、映画館、お父さんやお母さんの会社にも歴史はある。

大城君 オレの歴史っていわれてもね～。

新垣先生 確かにお前の歴史、っていわれてもピンとこないよな。人の場合なら「人生」っていう言葉に置き換えてもいい。お前の人生は世界史や日本史からみたらほんとに小さくてささやかなものかもしれないけど、お前やお前の両親にすれば、生まれてからこれまでの歩みっていうのはかけがえのないものじゃないか？今はまだ、たった十数年の短い人生かもしれないけどな。そして皆のこれまでの歩み、そしてこれからの歩みは、大切な思い出として皆や家族の記憶の中に残るんだよな。毎日、思い出にひたってるヤツはいないと思うけど、例えば、皆がこの中学を卒業して何十年もたったとき、卒業アルバムを見ると、どんな気持ちになると思う？「〇〇、元気かな、会ってみたいな～」とか「あのとき、あんなことがあったな」とか、思い出してふと、タイムスリップして懐かしい気持ちになると思うよ。思い出は目に見えないものだけど、「卒業アルバム」は形になって残るわけだ。

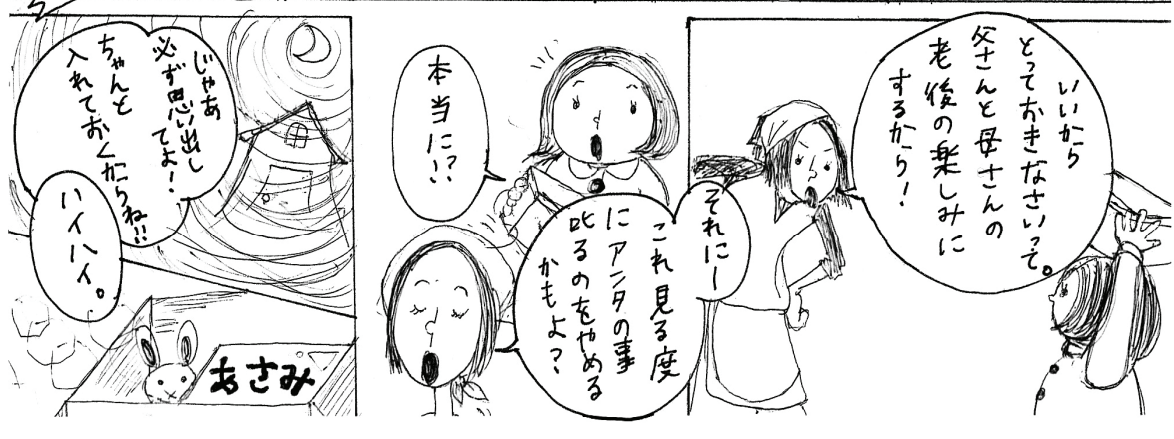
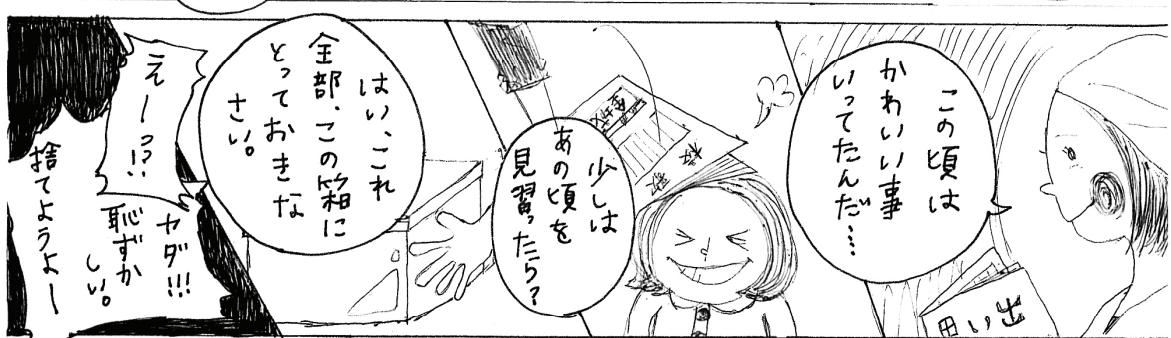
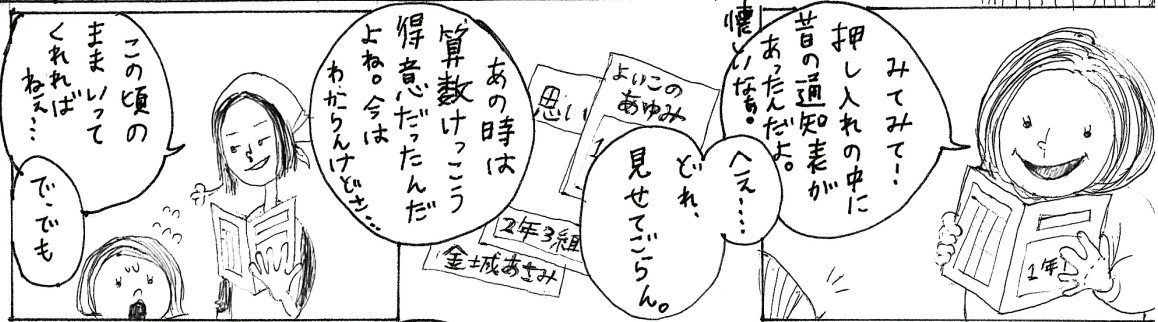
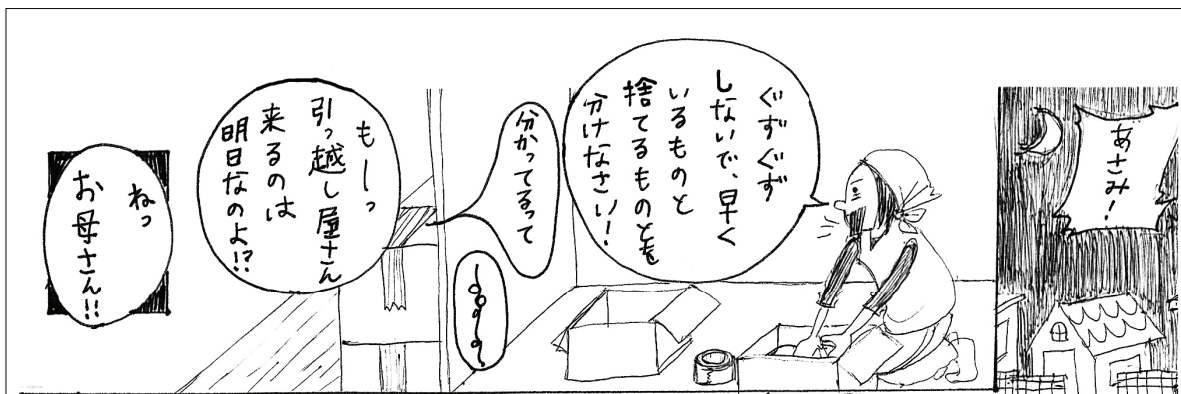
でも、形として残るのは何も卒業アルバムなんていうきちんとしたものだけじゃないんだ。例えば家ででの記録がどんなもんか、これから配るプリントでちょっと紹介しよう。(次頁イラストへ)

3-2 お家アーカイブズ(記録資料) -金城家の引っ越し風景から-

新垣先生 家庭では、子供たちの成長の記録である写真、描いた絵や作文、いわば家族の歴史っていうものは他のものにはかえられない大切なものなんだ。もしそういうものを取っておけなくても、捨てるってことは簡単じゃないと思うよ。捨てるべきかやっぱ残しておくべきか悩んだり、子供たちの幼かったときのことをあれこれ思い起こしたりして、それでも思い切って捨てることもあれば、そのまま残しておく人、写真におさめて現物はやむなく捨ててしまう人、結果はいくつかに分かれても迷う気持ちは同じだと思う。お前たちにはまだこの気持ち、理解できないかもしれないけど、親だってそんなふう迷ったり、そういうもんさ。それと、子供にとっても、大人になってお父さんやお母さんが亡くなってしまった後、もし写真も書き残したのもなんにもなかったら、きっと悲しいだろ？皆の子供たちに、おじいちゃんやおばあちゃんがどういう人だったのか、見せてあげられないのも淋しいよな。

また必要だから記録を残すこともあるんだ。例えば家を新築したときの図面なんかは、何十年もして増改築をするときの大事な基礎資料になるし、母子手帳にしても、皆がどのような状態で生まれて、いつ頃はしかに罹ったか、予防接種はちゃんと受けたか、なんていう情報をお母さんの記憶だけでなく正確な記録で教えてくれるわけだ。お母さんの記憶違ってもアリ、だからな。

「記録」なんていうと、スポーツ競技のタイムのこととか、何だかお役所にある難しい書類のようなイメージがあるかもしれないけどな、こんなふうに「記録」っていうのは、気持ち的な面でも現実的な生活の面でも意外と自分たちと結びつきがあるんだな。「家族」という小さな単位での大切な記録って、例えばこんなものなんだ。



3-3 「沖縄」の場合

新垣先生 じゃあ、「沖縄」っていう大きな地域の記録ってどんなものかな？沖縄にも、これまで歩んできた歴史があるよね。そうだなあ、一つ例に挙げるよ、その昔、沖縄が独立した王国だったってことは皆、知ってるよね…？

仲本君 先生、ジョーシキ！

新垣先生 知ってた？ごめん、ごめん。でも、王国っていうくらいだから王様もいてお城もあった。じゃあ、どんなにして王国ができたの？、どんな時代だったわけ？、なんで今はないの？、いつの間に日本になったわけ？、日本なのになんでアメリカの基地があるの？っていうか感じで、それぞれの時代にいろんな事があって、王国ができたり、日本になったり、日本なのにドルを使う時代があったり、基地が未だにあったりするわけさ。歴史っていうのは、それぞれの時代の人々がしてきたことや巻き込まれたことなんていう、いろんな事情とその結果っていうことなんじゃないかな。

家に帰ってお母さんに、なんでお父さんと結婚したか聞いてごらん。お父さんとお母さんの間の結婚までのいきさつも、家族の歴史の一コマだからね。これがないと皆も今こうして存在していないわけだから、これは大事なことだよ。ただしね、そこらへんのこと、お父さんもお母さんも何かに書き残しているわけじゃない、その当時、日記なんかつけていてそれを残していれば別だけどね。言葉にできない思い、っていうのもたくさんあったらうし、こういうのは二人の胸の中にだけしまっけていてもいいわけよ。

でも「沖縄」の歴史、ってことになるとういうわけにはいかない。人の記憶や胸の中だけにしまっけてしまったら、後々の人たちは昔、沖縄で何が起こったかわからなくなるだろ？人の思い出とか記憶とかって、それはそれで大事なことなんだけど、人って間違っけて覚えたり、無意識のうちに自分の都合のいいように記憶を置き換えてしまっけてすることもあるからね、そんなことがないように起こったままと記録してそれを残すことも大事なんだ。それぞれの時代に人々が何をしたのか、何が起こったか、どんな結果だったかっけてことを、書き残したり、写真に撮っけてしておいたら実際、その時代に生きていなくてもそのことを知ることが出来るわけさ。そんなふうには歴史は引き継がれていくんだな。

3-4 「歴史」の正体

新垣先生 「歴史」って、終わったことだから「歴史」っていうんだらうけど、でも終わったからといって、終わったわけではないんだよ。意味わからん？ 例えば、むか〜し、琉球王国時代に中国の影響を強く受けたことで、沖縄では今でも中国の習慣にあるような行事が行われたりするし、戦争に負けてアメリカに支配されていた時期が長かったから、食生活なんか未だにその影響を受けているともいわれているし、もちろん現代ならではの事情もいろいろある、という具合に、いろんな時代のコラボレーションで今という時代があるっていうことも言えるんだよ。もし最初から日本だったら、シーミー（清明祭）なんかなかったかもしれないし、歴史って意外と今の生活にも関係してることあるんだね。終わったけど、終わりじゃないって、簡単にいうとそういうこと、わかった？

福地さん でも自分たちに関係のあることばかりじゃないんじゃない？ 先生。

新垣先生 確かに直接関係のあることばかりじゃない。例えば、沖縄では戦争があっけてたくさんの人が犠牲になったね、そういうこととか、例えば、今までなんにもなかった原野を切り開いて新しい公園をつくる、なんて皆には関わりのないことかもしれないね。

吉嶺君 そうそう、全然関係ないね〜。

新垣先生 確かにお前一人にとって、直接は関係ないかもしれん。でも少し考えてごらん。戦争が起こった場合と起こらなかった場合、外国に支配された場合とそうでない場合、それはもう大変な違いだよな。そして戦争を体験し、他国支配を体験した皆のおじいさん、おばあさんが皆のお父さん、お母さんを育て、皆はその人たちの中で成長してきたんだ。そういうことを体験した人に育てられるのと、全くそんな経験のない人に育てられるの、ほんとになんの違いもないかな？そして、沖縄全体にとって、こんな体験をしたってことは、その後の沖縄にとって大いに関係アリ、なんだ。

ところで、皆、美ら海水族館行ったことあるか？水族館のある海洋博記念公園って海洋博の前、もう30年以上も前だ、あそこがどんなところだったか皆が生まれるず〜っと前のことだから知らないよな。実は先生も知らないんだ、海洋博へは行ったけど、那覇に住んでたからね。海洋博が開催されるってことであそこらへんはすごく開発されて今じゃ昔の面影はないよ。で、もし今、そんなところの何十年も前の写真なんか見たらどう感じるかな？、あまりの変りようにびっくりするんじゃないかな。でも、そんな変化は確かにお前には関係ないかもしれない。でもね、「ああ、こんなに変わったんだなあ」って思うだけでもいいんだよ。でも、沖縄全体にとってはその変化も変化の過程を記録することも大事なんだ、変化の良し悪しは別にしてな。

3-5 「記録」の在処

新垣先生 じゃあ、そんな大切な記録ってどこにあると思う？ それはな、「公文書館」っていうところなんだ。そんな記録を集めて、だれでも使えるようにちゃんと整理しておくのが公文書館の仕事ってわけだ。家族も世代を超えて続くもんだけど、「沖縄」ももちろん存在し続けていくわけだから、今生きている自分たちだけじゃなく、これから生まれてくる何十年先、あるいは何百年先の人たちのためにも、それま沖縄で起こったことを知ってもらえるようになが〜いこと記録を保管しなくちゃいけないんだ。

でもね、こんなに大事な「歴史の記録」だけど、残したくても残らないこともあるんだ。沖縄の場合は戦争で焼けてなくなってしまった大切な資料がたくさんあるんだよ。戦争がなかったとしても、火事で焼けてしまったり洪水で流されてしまう場合もあれば、長年経って紙がぼろぼろに崩れてしまうこともあるし、大事だっていうことを知らずに捨ててしまう人もいるかもしれない。だから大事なものが全て残っているわけではないんだな。

それとは逆に、「記録」を捨てなくっちゃいけない場合もあるんだ。矛盾しているように聞こえるかもしれんけどな、全部の資料を取っておくことは残念ながらできないんだ。考えてごらん、資料を全部とっておいたらどんどん増えて置く場所も足りなくなるし、明らかに残さなくてもいいものもあるだろうし。そこで、さっきの金城家のお母さんが言ってたように残すものと捨てるものを分けなくっちゃいけないんだ。でも、いざ捨てるとなると、今までは見向きもしなかったものでもなんだか惜しくなったりするよね。捨てるって難しいことなんだ。自分のものや家族のものなら捨てるも誰にも何も言われなくても、沖縄の歴史資料を選んで捨てるって、大変だよ。後で文句いわれるかもしれないし、あの資料がないから問題解決が難しくなった、っていうことがあるかもしれないしね。でもスペースには限りがあるし、捨てるのは避けられないわけ。公文書館って、資料を集めたり、かと思えば捨てたりして、変なところと思うかもしれないけど、選んだり捨てたりするにも知識が必要なんだ、なんてたって皆のものなんだからさっき言ったように責任重大なわけ。そんな仕事があったなんて、たぶん皆は初めて知っただろ？ でも外国では公文書館は日本より進んでいるところが多いんだ。アメリカをはじめヨーロッパ、中国や他のアジアの国と比べて歴史も浅いしね。

記録を残すってことが苦手なのかもしれないね。だから今問題になっているような、消えた年金記録、なんてことが起こるんじゃないかな。納めたはずの年金が納めたことになっていないわけだから頭にくるよな。皆も小さい頃、お母さんに預けてあったお年玉がなぜか自分の通帳に入っていない、ってことなかった？ ちゃんと記帳しないと、それはもうお母さんが使ってしまったって、消えたお年玉、ということになる。なあ、記録するって大事なことだろう？

それでは、今日はこの辺で終わり。今度は、実際に公文書館へ行ってみよう。あさみは通知表とか作文を箱の中にしまったけど、沖縄の歴史資料ってどんなものでどんなふうに使ってあるのか、まずは見てみよう。

おわりに

どうすれば中学生が最後まで読んでくれるだろうか、ということを考えながら書きすすめてきたが、内容や表現、展開方法等、課題はつきない。テーマである、「歴史とその記録を残す」、という一見普通の彼らからはかけ離れたことが、見過ごされているが実は、日頃の生活の中に見出せることである、ということに気づいてほしいと思う。彼らが果たして公文書館の利用者になるのか否か。利用者になりえなかったとしても、公文書館の存在と意義を知り、評価する人々となってほしいと願っている。そのために、彼らに対するいくつかの試みのひとつとしてのこの私案へ、意見を待ちたい。